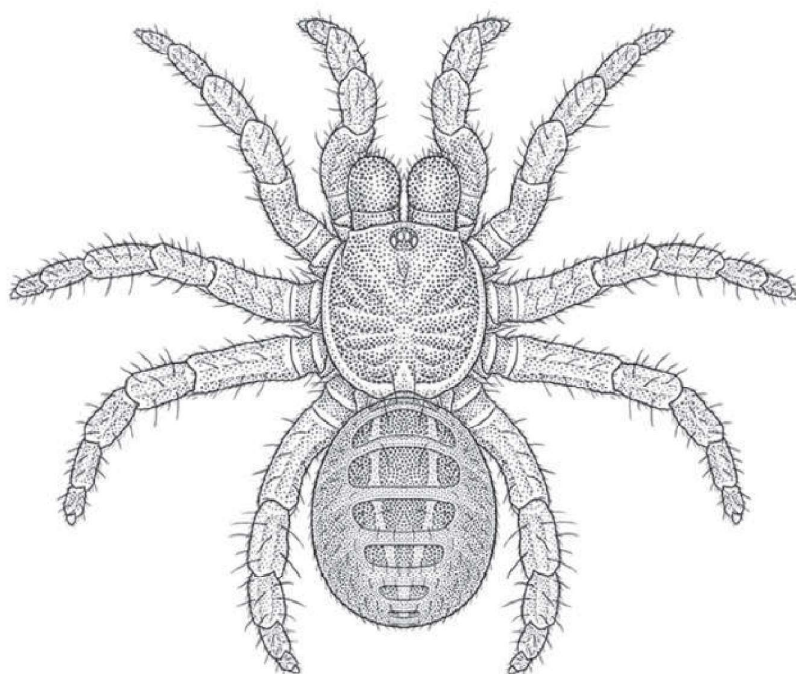


クモ形類等



絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヒゴキムラグモ

Heptathela higoensis

クモ形類等概論

● 福岡県レッドデータブック事務局／中島 淳

■ 概要

「クモ形類等」は前回の福岡県RDB2014において新たに選定対象として加えられ、今回が2回目の改訂となる。本リストの対象種は昆虫類・貝類以外の陸生無脊椎動物である。したがって、分類群としてはクモ綱のクモ目、ザトウムシ目を中心に、ダニ類、ムカデ綱のゲジ類、ムカデ類、ヤスデ類、甲殻綱の陸生のワラジムシ類、環形動物門のミミズ類、ヒル類などの陸生種が主要なものとなる。また、こうした区分をしていることから、クモ綱のうちカブトガニや多くの甲殻綱、環形動物門などの水生種は「魚類・甲殻類等分科会」で扱っている。今回の改訂作業においては、県内に有識者が不在であることから分科会としての作業を行わずに事務局対応とし、前回リストとその後の文献調査に基づいてリスト原案を作成後、適宜県外の有識者からヒアリングを行う方法で掲載種とランクの決定を行った。ランクの決定には、得られた情報に基づいて後述する選定基準に従った。以下、各分類群について現状を記す。

クモ目は主に節足動物を食べる捕食者として、陸上生態系において重要な役割を果たしている。近年の研究では地球上で年間にクモ類が捕食する生物量は4億～8億トンとの試算もあり (Nyffeler & Birkhofer, 2017)、農業害虫などの大発生を抑制するなどいわゆる生物多様性の調整サービスの一環として、我々の社会にも大きく貢献している分類群と言える。クモ目はこれまでに国内から約1,700種が記録されており (谷川, 2023)、福岡県内では2023年時点で約430種が記録されている (馬場友希博士, 私信)。クモ目の分布がよく把握されている他県において500種を超える地域もあることや、本県における他のよく調査された生物分類群の種数の多さから考えると、本県においてはさらなる調査が必要な段階であると言える。クモ目は県内ではあらゆる環境にみられるが、このうち里地里山などの二次的自然環境に生息する種 (ヒゴキムラグモ, キシノウエトタテグモ) や高標高地に生息する種 (ダイセンヤチグモ) については、その環境の悪化によって減少傾向にあることは明らかであり、そのうちある程度の生息情報があるものについて今回評価を行うことができた。しかし、県内では特に湿地環境の悪化が顕著であり、そうした環境を利用するコガネグモ類やコモリグモ類の中には減少している種もいると考えられるものの、調査は不十分であり今回は評価ができなかった。今後の知見の蓄積が望まれる。一方、前回リストで情報不足として挙げたドウシグモについては、未発表ながら県内では市街地においても採集されていること (鈴木佑弥博士, 私信)、本種に特定した調査では発見が容易であること (小松, 2020)、実際にそうした方法で福岡市・立花山での多数の発見例があること (Komatsu, 2016) から、少なくとも県内での絶滅のおそれはないと判断し、今回リストから除外した。

ザトウムシ目についてはこれまでに国内から約80種、県内から約20種が知られている (井原ほか, 2014)。県内ではあらゆる環境にみられるが、このうち里地里山などの二次的自然環境に生息する種 (ゴホントゲザトウムシ) や高標高地に生息する種 (ヒコスベザトウムシ, ヒライワスベザトウムシ, ヒメタテヅメザトウムシ)、海岸に生息する種 (ヒトハリザトウムシ) について

は、その環境の悪化によって減少傾向にあることは明らかであり、そのうちある程度の生息情報があるものについて今回評価を行うことができた。ザトウムシ目は一般的に移動能力が低く地域的な遺伝的分化が生じやすいこと、局地的な分布を示す種が多く存在することが知られていることから、保全対象種としては明らかに過小評価されている。さらなる知見の蓄積が望まれる。

クモ目とザトウムシ目以外の分類群については県内産種のリストも整備されていない状況であり、候補種の選定も困難であった。特にムカデ類、ヤスデ類、ワラジムシ類などで二次的自然環境や高標高地、海岸域に生息する種の状況は悪化している可能性が高いと思われる。例えばイソフサヤスデは、その生息環境の特性から希少である可能性があり検討を行ったものの、判断する材料に乏しく、今回はリストに含めなかった。県内における「クモ形類等」に関する情報は全体的に少なく、調査者・研究者が明らかに不足している。今後の課題である。

■ 選定基準

今回の選定では、絶滅危惧Ⅱ類1種、準絶滅危惧7種、情報不足6種が挙げられた。以下に、選定基準を示す。

絶滅 (EX) : 福岡県に生息していたことが確実で、最後の個体が死亡したことに疑いがないか、あるいは科学的調査が実施されているものの、50年以上確認情報がない。

野生絶滅 (EW) : 野外での絶滅は確実であるが、福岡県産であることが確実な個体群が公的機関で飼育・系統保存されている。

絶滅危惧ⅠA類 (CR) : 次の①～⑥のいずれかに該当すること ①過去10年間あるいは3世代の減少率が80%以上であった、②今後10年間あるいは3世代の減少率が80%以上と予想される、③出現範囲が1.3km²以下もしくは生息地面積が0.13km²以下、④生息地が過度に分断されているか1地点のみ、⑤出現範囲、生息地面積に極度の減少がみられる（数量評価は難しいものの、①②と同等程度と推察される場合）、⑥近年（30～50年）の生息情報がないが、絶滅したかどうかの判断が難しい。

絶滅危惧ⅠB類 (EN) : 次の①～⑤のいずれかに該当すること ①過去10年間あるいは3世代の減少率が50%以上であった、②今後10年間あるいは3世代の減少率が50%以上と予想される、③出現範囲が65km²以下もしくは生息地面積が6.5km²以下、④生息地が過度に分断されているか2～5地点のみ、⑤出現範囲、生息地面積に大幅な減少がみられる（数量評価は難しいものの、①②と同等程度と推察される場合）

絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 次の①～⑤のいずれかに該当すること ①過去10年間あるいは3世代の減少率が30%以上であった、②今後10年間あるいは3世代の減少率が30%以上と予想される、③出現範囲が260km²以下もしくは生息地面積が26km²以下、④生息地が過度に分断されているか6～10地点のみ、⑤出現範囲、生息地面積に減少がみられる（数量評価は難しいものの、①②と同等程度と推察される場合）

準絶滅危惧 (NT) : 上記に当てはまらない一方で、出現範囲、生息地面積に減少がみられる

情報不足 (DD) : 評価できるだけの情報がない種のうち、十分な情報が得られた場合に上記のいずれかのカテゴリーに判定される可能性がある。

■ ハビタットと保全対策

福岡県内における「クモ形類等」の保全上重要な環境として以下が挙げられる。

(1)自然海岸

県内の自然海岸として日本海側では岩礁や砂浜，瀬戸内海側や有明海側ではヨシ原や干潟が代表的なものである。今回挙げた種のうち，準絶滅危惧としたヒトハリザトウムシ，イソタナグモがこうした環境に生息する種である。県内の自然海岸は，道路や堤防，埋立てなどの開発の影響を強く受けており，陸域の樹林帯から水際まで続く本来のエコトーンを伴う姿は失われつつある。また，松くい虫防除のための薬剤散布による悪影響も大きいと思われる。したがって，現在良好な自然海岸は積極的な保全を行うと同時に，小規模であってもエコトーン帯の再生を行っていくことは，こうした環境に生息する種の絶滅回避に有効である。なお，県内の自然海岸に生息するダニ類，ムカデ類，ヤスデ類，ワラジムシ類の中には絶滅のおそれがある種もいるものと思われ，野外調査に基づく分布知見の蓄積も必要である。

(2)山地

県内では標高1,000mを越えるブナ林を伴う環境が代表的なもので，特に英彦山地では古くから調査がなされており知見が多く，英彦山をタイプ産地とする種（ヒコスベザトウムシ，ヒライワスベザトウムシ，ヒメタテヅメザトウムシ）や本県では英彦山でしか記録のない種（アカオニグモ）が存在するなど，本分類群の保全上のホットスポットの一つである。県内のこうした高標高の山地は，シカ食害による下層植生の破壊や乾燥化，人為的な気候変動の影響による温度環境の変化，降水量の変化により1990年代以降に悪化している。したがって，現在良好な山地森林は積極的な保全を行うと同時に，シカ対策を中心とした環境再生も進めていくことが，こうした環境に生息する種の絶滅回避に有効である。なお，県内の山地に依存するダニ類，ムカデ類，ヤスデ類，ワラジムシ類の中には絶滅のおそれがある種もいるものと思われ，野外調査に基づく分布知見の蓄積も必要である。また，県内では背振山地や釈迦岳山地など標高1,000mをこえる山地は英彦山地の他にもあるが，「クモ形類等」に該当する分類群に関する調査は全体的に不足している。こうした地域を絞った調査も進めていく必要がある。

(3)里地里山

いわゆる二次的自然環境に該当する環境で，県内の低平地に広く存在する水田や畑地，その周辺の草地・二次林からなる環境が代表的である。今回挙げた種のうち，絶滅危惧II類としたヒゴキムラグモ，準絶滅危惧としたキシノウエトタテグモ，ゴホントゲザトウムシ，情報不足としたワスレナグモ，キノボリトタテグモがこうした環境に生息する種である。農業形態の変化や近代的な圃場整備の進展，管理放棄，宅地や工場用地としての開発などにより，その環境の悪化が続いている。したがって，いわゆる里地里山保全の枠組みで，管理放棄地の再生活動やビオトープ化など，官民一体となった継続的な活動を進めていくことが，こうした環境に生息する種の絶滅回避に有効である。また，里地里山に存在するため池や水路などの湿地環境は県内においても悪化の一途をたどっており，両生類，魚類，昆虫類，貝類などにおいてこうした環境に生息する種の多くが絶滅が危惧される状況にある。「クモ形類等」に該当する分類群においても同様である可能性が高いが，調査は全体的に不足している。こうした地域における野外調査に基づく分布知見の蓄積も必要である。

(4)その他

洞窟性のクモ目、ザトウムシ目などについては知見が極めて不足しているが、他の分類群の状況を考えれば同様に絶滅のおそれがある種が存在している可能性が高い。しかし県内におけるまとまった知見がほとんどないことから、野外調査に基づく分布知見の蓄積が必要である。

以上、「クモ形類等」に関して重要なハビタットとそれぞれのハビタットにおける保全対策を整理したが、森林伐採、海岸開発、土地造成、道路工事、気候変動、シカ増加、遷移進行、管理放棄が主要な減少要因として整理できる。また、本分類群においては調査者や研究者の不足による情報の少なさは大きな課題であり、地域のどこにどんな種が分布しているのか、といった基礎的な情報の集積は今後積極的に行っていく必要がある。こうした情報なくては適切な保全対策の立案は極めて困難である。今後は今回情報不足として挙げた種、海岸性種、山地性種、湿地性種を中心に、分布調査を進めていく必要がある。

謝辞

当リスト作成にあたり、クモ目については馬場友希博士と鈴木佑弥博士から、ザトウムシ目については鶴崎展巨博士から多くご教示いただいた。ここに厚くお礼申し上げます。

■ 調査協力者名

小山彰彦，鈴木佑弥，鶴崎展巨，馬場友希，廣津敬也

■ 写真提供者名

鈴木佑弥，鶴崎展巨，中島 淳，馬場友希

■ 参考文献（引用文献）

- 逢沢峰昭・森嶋佳織（2018）1980年代のニホンヤマビル分布。日本森林学会誌，100：65-69.
- 馬場友希（2007）福岡県能古島のクモ。Kishidaia，91：49-56.
- 馬場友希・久末 遊（2021）福岡県で採集されたクモ。Kishidaia，118：111-114.
- 馬場友希・新海 明・谷川明男（2009）文献による福岡県産クモ類目録。Kishidaia，95：57-80.
- 井原 庸・逸見泰久・下村通誉（2014）クモ形類等概論。福岡県環境部自然環境課，pp.263-267。福岡県の希少野生生物－福岡県レッドデータブック2014－，福岡県。
- Komatsu, T. (2016) Diet and predatory behavior of the Asian ant-eating spider, *Asceua (formerly Doosia) japonica* (Araneae: Zodariidae). SpringerPlus, 5: 577.
- 小松 貴（2020）西日本各地におけるドウシグモの記録ならびに生息地発見のヒント。ニッチェ・ライフ，8：27-28.
- 野口奨悟・信太理央・下岡敏士・女澤典典・岩永 柊・衛藤聡太・潮上太郎・岸田知磨・鈴木佑弥（2023）九州大学伊都キャンパスのクモ目録。Kishidaia，122：141-155.
- Nyffeler, M., Birkhofer, K. (2017) An estimated 400–800 million tons of prey are annually killed by the global spider community. The Science of Nature, 104: 30.
- 大熊千代子（1960）彦山蜘蛛目録I 真正蜘蛛目。九州大学農学部附属彦山生物学研究所。
- 笹岡文雄（2014）福岡県福岡市におけるトタテグモ類。Kishidaia，104：37-38.

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版.

信太理央・久末 遊・相馬 純 (2023) 2020-2022年に福岡県で採集されたクモ類. Kishidaia, 122 : 134-137.

鈴木佑弥・久末 遊 (2022) 2020-2021年に福岡県で採集したクモ. Kishidaia, 121 : 108-109.

鈴木佑弥・久末 遊 (2022) 福岡県で採集したクモ類. Kishidaia, 120 : 178-180.

谷川明男 (2015) 日本産キムラゲモ類の系統地理. 生物科学, 66 : 69-78.

谷川明男 (2023) 日本産クモ類目録ver.2023 R1. <http://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tknw/japan.pdf> (参照 : 2023年12月1日)

辻 雄介・久末 遊 (2021) 福岡県におけるゴホントゲザトウムシの採集記録. Kishidaia, 118 : 127-129.

Tsurusaki, N. (1985) Taxonomic revision of the *Leiobunum curvipalpe*-group (Arachnida, Opiliones, Phalangidae). : I. hikocola-, hiasai-, kohyai-, and platypenis-subgroups. Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University. Series 6, Zoology, 24(1): 1-42.

鶴崎展巨・田中 孟・行徳直久 (2011) ギンボシザトウムシ (クモガタ綱ザトウムシ目) の九州本土と山口県からの新記録. 佐賀自然史研究, 16 : 33-36.

脇 悠太・豊田 鮎 (2022) 香川県におけるニホンフサヤスデ属 3 種の記録. ニッチェ・ライフ, 9 : 88-90.

表 クモ形類等-1 新旧カテゴリー対照表

	福岡県RDB2014のカテゴリー							再選定種数※	追加種数※	掲載種数※
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足			
今回のカテゴリー	絶滅							0	0	0
	野生絶滅							0	0	0
	絶滅危惧IA類							0	0	0
	絶滅危惧IB類							0	0	0
	絶滅危惧II類					ヒゴキムラグモ		1	0	1
	準絶滅危惧					キシノウエタテグモ ダイセンヤチグモ ヒトハリザトウムシ ヒコスベザトウムシ ヒライワスベザトウムシ	ゴホントゲザトウムシ ヒメタテツメザトウムシ	7	0	7
	情報不足						ワスレナグモ キノボリタテグモ イソタナグモ	3	3	6
(合計)							11	3	14	

上位のカテゴリーに移行
 下位のカテゴリーに移行
 カテゴリー変更なし

	福岡県RDB2014のカテゴリー							合計種数
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	
今回除外した種※							ドウシグモ	1

今回追加した種	
今回のカテゴリー	絶滅
	野生絶滅
	絶滅危惧IA類
	絶滅危惧IB類
	絶滅危惧II類
	準絶滅危惧
	情報不足

※ 再選定種数 …福岡県RDB2014の選定種のうち、今回（福岡県RDB2024）でも再び選定した種の数。
 追加種数 …福岡県RDB2014の選定種以外で、今回（福岡県RDB2024）において新たに選定した種の数。
 掲載種数 …福岡県RDB2024に選定した種の数。（「再選定種数」と「追加種数」の合計）
 今回除外した種…福岡県RDB2014の選定種のうち、再評価の結果、今回（福岡県RDB2024）は選定しなかった種。

植物群落

植物等

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類等

クモ形類等

貝類

ヒゴキムラグモ

Heptathela higoensis Haupt, 1983

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2014
絶滅危惧Ⅱ類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 県内では南部に限って分布するが、これは本種の分布北限となる。本種を対象とした調査は不足しているものの、現在確認されている生息地は5か所内外である。特にメスの移動能力が極めて低く、好適生息環境の範囲も限られることから、山林開発や林道整備の影響を受けていると思われる。前回から状況は改善していないと判断し、引き続き同ランクとして評価を行った。

危機要因 森林伐採, 土地造成, 道路工事

分布情報 大牟田市, 八女市, みやま市

種の概要 体長は10~15mmで、雄の方が小型。背面は褐色で、歩脚は太い。触肢が発達しているため、脚が5対あるように見える。腹部の背面にやや硬化した背板が並ぶ。崖地などに横向きまたは斜め下向きに穴を掘り、入り口には土やコケを付着させた片開きの蓋をつける。九州におけるキムラグモ属の分類には不確定な部分が残るが、少なくとも本種については有効なタクソンであると考えられる。

特記事項 —



撮影: 中島 淳

キシノウエトタテグモ

Latouchia typica (Kishida, 1913)

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧環境省
準絶滅危惧

選定理由 寺社や城郭、緑地公園などの平地から丘陵地の樹林を伴う攪乱環境に生息する。地中に穴を掘り巣をつくる。県内では近年になって福岡城や飯塚市から新たに記録されたが、分布は局地的で個体数も少ない。詳細なデータはないが、前回から状況は改善していないと判断し、引き続き同ランクとして評価を行った。本州、四国、九州に分布する。

分布情報 福岡市中央区, 飯塚市



撮影: 馬場友希

ダイセンヤチグモ

Coelotes eharai Arita, 1976

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧環境省
—

選定理由 比較的標高の高い森林の林床に生息する。県内では英彦山の標高1,000mより上で記録されているのみ。同所ではシカの増加により林床植生の破壊が進んでおり、本種の生息状況も悪化しているものと思われる。詳細なデータはないが、前回から状況は改善していないと判断し、引き続き同ランクとして評価を行った。本州西部、四国、九州北部の高標高地に分布する。

分布情報 添田町



撮影: 鈴木佑弥

ヒトハリザトウムシ

Psathyropus tenuipes L. Koch, 1878

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧

環境省
準絶滅危惧

選定理由 海岸や河川感潮域の岩の間などに生息する。自然海岸への依存度が高いため、市街地周辺では埋立や護岸整備によって生息適地が縮小している他、道路整備などによって陸域と分断されるとみられなくなるため、生息地は減少傾向にあると考えられる。詳細なデータはないが、前回から状況は改善していないと判断し、引き続き同ランクとして評価を行った。北海道からトカラ列島にかけて分布する。

分布情報 北九州市, 糸島市



撮影: 鶴崎展巨

ヒコスベザトウムシ

Leiobunum hikocola Suzuki, 1966

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧

環境省
—

選定理由 英彦山がタイプ産地で、比較的標高の高い森林で生息が確認されている。英彦山ではシカの増加により低地から高標高地にかけて林床植生の破壊が進んでおり、本種の生息状況も悪化しているものと思われる。詳細なデータはないが、前回から状況は改善していないと判断し、引き続き同ランクとして評価を行った。九州(福岡県), 屋久島, 奄美大島に分布する。

分布情報 添田町



撮影: 鶴崎展巨

ヒライワスベザトウムシ

Leiobunum hiraiwai (Sato & Suzuki, 1939)

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧

環境省
—

選定理由 英彦山がタイプ産地で、森林域において生息が確認されている。英彦山ではシカの増加により低地から高標高地にかけて林床植生の破壊が進んでおり、本種の生息状況も悪化しているものと思われる。詳細なデータはないが、前回から状況は改善していないと判断し、引き続き同ランクとして評価を行った。関東以西の本州, 九州(福岡県), 対馬に分布する。

分布情報 添田町



撮影: 鶴崎展巨

ゴホントゲザトウムシ

Himalphalangium spinulatum (Roewer, 1911)

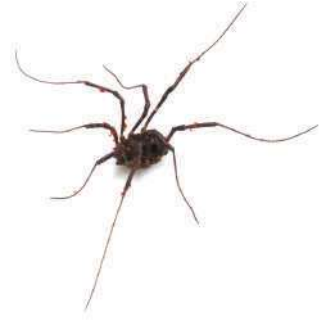
準絶滅危惧(NT)

2014
情報不足

環境省
情報不足

選定理由 人里近くの雑木林や竹林などに生息するが産地は不連続で局所的である。定期的な攪乱のある里山環境を好む種で、県内では開発や農業形態の変化等を原因として生息に適した環境が減少していると考えられる。前回は情報不足として評価したが、その後いくつかの記録があり、生息環境の劣化傾向を加味して今回は準絶滅危惧とした。国内では関東地方以西の本州、四国、九州に散発的に分布する。

分布情報 福岡市西区、飯塚市、行橋市、小都市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、朝倉市、糸島市、篠栗町



撮影：中島 淳

ヒメタテヅメザトウムシ

Yuria pulcra Suzuki, 1964

準絶滅危惧(NT)

2014
情報不足

環境省
—

選定理由 英彦山がタイプ産地で、山地森林の落葉層中に生息する。英彦山や筑豊地域ではシカの増加により低地から高標高地にかけて林床植生の破壊が進み、生息適地が減少している。前回は情報不足として評価したが、生息環境の悪化を加味して今回は準絶滅危惧とした。近畿地方以西の本州、四国、九州に分布する。

分布情報 飯塚市、添田町



撮影：鶴崎展巨

ニホンヤマビル

Haemadipsa japonica Whitman, 1886

情報不足(DD)

2014
—

環境省
—

選定理由 山地森林に生息する陸生のヒル。吸血性で、シカ等の増加により全国的に増加傾向にあることが知られる。一方で、福岡県内での確実な記録は1888年の沖ノ島、1889年の英彦山の例があるのみで、英彦山では昭和初期までにみられなくなった。本種を対象とした調査は不足しており、今回情報不足として評価した。本州、四国、九州、屋久島に分布する日本固有種。

分布情報 宗像市、添田町

ワスレナグモ

Calommata signata Karsch, 1879

情報不足(DD)

2014
情報不足環境省
準絶滅危惧

選定理由 寺社や畑地などの攪乱環境に生息する。地中に穴を掘り巣をつくる。県内での採集例は少なく分布は局地的であるが、本種を対象とした調査は不足しているため、引き続き情報不足として評価を行った。本州、四国、九州に分布する。

分布情報 福岡市城南区, 朝倉市, 宇美町



撮影: 馬場友希

キノボリトタテグモ

Conothele fragaria (Dönitz, 1887)

情報不足(DD)

2014
情報不足環境省
準絶滅危惧

選定理由 寺社や城郭, 山地森林などでみられ, 樹木や石垣, 崖地などの表面に細長い袋状の巣をつくる。県内では近年でも記録されているが, 本種を対象とした調査は不足しているため, 引き続き情報不足として評価を行った。本州, 四国, 九州, 南西諸島に分布する。

分布情報 北九州市, 福岡市西区, 大牟田市, 行橋市, 宗像市, 糸島市, 宇美町, 添田町



撮影: 鈴木佑弥

アカオニグモ

Araneus pinguis (Karsch, 1879)

情報不足(DD)

2014

環境省

選定理由 草原や湿原, 河川敷, 樹林際などでみられ, 垂直な円網を張る。北方系の種で, 国内では北海道, 本州, 四国, 九州に分布するが, 西日本では高標高地に限られる。県内では大熊(1960)による英彦山からの記録があるのみで, 近年の発見例がない。気候変動の影響を受けて減少している可能性があり, 今回新たに評価を行った。

分布情報 添田町



撮影: 馬場友希

イソタナグモ

Paratheuma shirahamaensis (Oi, 1960)

情報不足(DD)

2014
情報不足環境省
—

選定理由 海岸や河口域の潮上帯の岩の隙間などに主に生息する。特に都市近郊の海岸において生息に適した環境が減少している可能性が高いが、本種を対象とした調査は不足している。引き続き情報不足として評価を行った。北海道～南西諸島の海岸に広く分布する。

分布情報 北九州市, 福岡市, 行橋市, 古賀市



撮影: 鈴木佑弥

ギンボシザトウムシ

Pseudogagrella amamiana (Nakatsudi, 1942)

情報不足(DD)

2014
—環境省
—

選定理由 標高300m以下の低山地の森林に生息する。県内では久留米市(高良山)と宗像市(さつき松原)での採集・発見記録がある。県内では普通にみられる種ではないことから、情報不足として新たに評価を行った。今後、県内での生息情報の蓄積が望まれる。九州から南西諸島、および山口県、神奈川県、茨城県(関東の2県はおそらく移入)に分布する。

分布情報 久留米市, 宗像市



撮影: 鶴崎展巨